

[B年] 公現後第4日(2023年1月29日)

【旧約聖書日課】 ハガイ書 2章1～9節

1七月二十一日に、主の言葉が、預言者ハガイを通して臨んだ。<sup>2</sup>「ユダの総督シャルティエルの子ゼルバベルと大祭司ヨツァグクの子ヨシュア、および民の残りの者に告げなさい。

3 お前たち、残った者のうち

誰が、昔の栄光のときのこの神殿を見たか。  
今、お前たちが見ている様は何か。  
目に映るのは無に等しいものではないか。

4 今こそ、ゼルバベルよ、勇気を出せと

主は言われる。  
大祭司ヨツァグクの子ヨシュアよ、勇気を出せ。  
国の民は皆、勇気を出せ、と主は言われる。  
働け、わたしはお前たちと共にいると  
万軍の主は言われる。

5 ここに、お前たちがエジプトを出たとき

わたしがお前たちと結んだ契約がある。  
わたしの霊はお前たちの中にとどまっている。  
恐れてはならない。

6 まことに、万軍の主はこう言われる。

わたしは、間もなくもう一度  
天と地を、海と陸地を揺り動かす。

7 諸国の民をことごとく揺り動かし

諸国のすべての民の財宝をもたらし  
この神殿を栄光で満たす  
と万軍の主は言われる。

8 銀はわたしのもの、金もわたしのものと

万軍の主は言われる。

9 この新しい神殿の栄光は昔の神殿にまさると

万軍の主は言われる。  
この場所にわたしは平和を与える」と  
万軍の主は言われる。

【使徒書日課】

コリントの信徒への手紙二 6章14節～7章1節

6<sup>14</sup>あなたがたは、信仰のない人々と一緒に不釣り合いな軛につながれてはなりません。正義と不法とにどんなかわりがありますか。光と闇とに何のつながりがありますか。<sup>15</sup>キリストとベリアルにどんな調和がありますか。信仰と不信仰に何

の関係がありますか。<sup>16</sup>神の神殿と偶像にどんな一致がありますか。わたしたちは生ける神の神殿なのです。神がこう言われているとおりです。

「『わたしは彼らの間に住み、巡り歩く。そして、彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。』

17 だから、あの者どもの中から出て行き、遠ざかるように』と主は仰せになる。

『そして、汚れたものに触れるのをやめよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、

18 父となり、

あなたがたはわたしの息子、娘となる。』  
全能の主はこう仰せられる。』

7<sup>1</sup>愛する人たち、わたしたちは、このような約束を受けているのですから、肉と霊のあらゆる汚れから自分を清め、神を畏れ、完全に聖なる者となりましょう。

【福音書日課】 ルカによる福音書 21章1～9節

1 イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。<sup>2</sup>そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、<sup>3</sup>言われた。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。<sup>4</sup>あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。』

5 ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。

6 「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。』

7 そこで、彼らはイエスに尋ねた。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。』

8 イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。<sup>9</sup>戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。』

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## ハガイ書 2章1～9節

<sup>1</sup>第七の月の二十一日に、主の言葉が預言者ハガイを通して臨んだ。<sup>2</sup>「ユダの総督シャルティエルの子ゼルバベルと大祭司ヨツァダクの子ヨシュア、および民の残りの者に告げよ。

<sup>3</sup>あなたがた、生き残った者のうちかつて栄光に輝いていたこの神殿を見た者は誰か。今、あなたがたが見ているものは何なのか。目に映るのは無に等しいものではないか。

<sup>4</sup>ゼルバベルよ、今こそ強くあれ——主の仰せ。大祭司ヨツァダクの子ヨシュアよ、強くあれ。この地のすべての民よ、強くあれ——主の仰せ。

働け、私はあなたがたと共にいる——万軍の主の仰せ。

<sup>5</sup>あなたがたがエジプトを出たときに私があなたがたと結んだ契約によって私の霊はあなたがたの中にとどまっている。恐れてはならない。

<sup>6</sup>万軍の主はこう言われる。間もなく、もう一度私は天と地を、海と陸地を揺り動かす。

<sup>7</sup>諸国民をすべて揺り動かし諸国民のあらゆる財宝をもたらしこの神殿を栄光で満たす——万軍の主は言われる

<sup>8</sup>銀は私のもの、金も私のもの——万軍の主の仰せ。

<sup>9</sup>この新しい神殿の栄光は以前のものにまさる——万軍の主は言われるこの場所に私は平和を与える——万軍の主の仰せ。」

## コリントの信徒への手紙二 6章14節～7章1節

<sup>6</sup><sup>14</sup>あなたがたは、不信者と、釣り合わない軛を共にしてはなりません。正義と不法とにどんな関りがありますか。光と闇とにどんな交わりがありますか。<sup>15</sup>キリストとペリアルとにどんな調和がありますか。信者と不信者とにどんな関係がありますか。<sup>16</sup>神の神殿と偶像とにどんな一致がありま

すか。私たちは生ける神の神殿なのです。神がこう言われているとおります。

「『私は彼らの間に住み、巡り歩く。』

私は彼らの神となり、彼らは私の民となる。』

<sup>17</sup>だから、彼らの中から出て行き彼らから離れよ』と主は言われる。

『汚れたものに触れるな。』

そうすれば、私はあなたがたを受け入れ

<sup>18</sup>あなたがたの父となり

あなたがたは私の息子、娘となる。』

と全能の主は言われる。」

<sup>7</sup><sup>1</sup>愛する人たち、私たちは、このような約束を受けているのですから、肉と霊のあらゆる汚れから自分を清め、神を恐れ、完全に聖なる者となりましょう。

## ルカによる福音書 21章1～9節

<sup>1</sup>イエスは目を上げて、金持ちたちが献金箱に献金を入れるのを見ておられた。<sup>2</sup>そして、一人の生活の苦しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、<sup>3</sup>言われた。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、誰よりもたくさん入れた。<sup>4</sup>あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」

<sup>5</sup>ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。

<sup>6</sup>「あなたがたはこれらの物に見とれているが、積み上がった石が一残らず崩れ落ちる日が来る。」

<sup>7</sup>そこで、彼らはイエスに尋ねた。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、それが起こるときには、どんな徴があるのですか。」<sup>8</sup>イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。私の名を名乗る者が大勢現れ、『私がそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、付いて行ってはならない。<sup>9</sup>戦争や騒乱があると聞いても、おびえてはならない。こういうことは、まず起こるに違いないが、それですぐに終わりが来るわけではない。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・1月29日「公現後第4主日」の日課主題は「新しい神殿」。「聖書」の描くイスラエル史上、通例で「神殿」と称されるのは「エルサレム神殿」を指す。主イエスおよび初代教会の時代まで「エルサレム神殿」は破壊と再建を繰り返しながら維持されるが、紀元70年、ユダヤ戦争の中でローマ軍によって破壊された後は再建されることなく現在に至っている。

・旧約聖書日課は、「ハガイ書」から、再建される「新しい神殿」の幻を告げる預言の箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、「神の神殿」としての信仰者が汚れから離れているべきことを教える箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、「やもめの献金」の逸話と「神殿の崩壊と終末に関する教え」の冒頭部分を含む箇所。

**旧約日課(ハガイ2章より)**

・「ハガイ書」は、ユダヤ正典「後の預言者」の第四「小預言者」に含まれる10番目の預言書。「預言者ハガイ」は、標題に示されるように、バビロン捕囚からの解放後、ペルシア王ダレイオスの治世に再建事業が滞っていたエルサレムで短期間の預言活動をした人物とされる。彼の名は、「エズラ記」(5:1, 6:14)が「イドの子ゼカリヤ」と共に取り上げているが、おそらく、「ハガイ書」および「ゼカリヤ書」が「エズラ・ネヘミヤ記」と同じか同一集団の書記官職によって著されたことによる。

・バビロニア王ネブカドネツアルによってエルサレムを破壊された滅亡した南王国は、しかし、新興バビロニア王国台頭の時期にヨシヤ王(在位=前640~609年ごろ)が親バビロニア政策をとったことが功を奏し、ダビデ王家の王位継承者がバビロン捕囚時代を通してバビロン王の庇護の下に置かれ、王家は存続していた。その末裔となるのが、バビロニア帝国に代わって支配者となったペルシアの時代にユダの地に帰還を許された集団の「総督」とされた「シェアルティエルの子ゼルバベル」である。彼ら王族と共に、エルサレム神殿の祭司団もバビロン捕囚の時代を通してバビロンで存続しており、エルサレム再建事業の共同指導者として「総督ゼルバベル」の片腕となったのが「大祭司ヨツァダクの子ヨシュア」である。ペルシア王キュロスは、前539年にバビロン市に侵攻しバビロニア帝国を滅亡させると、翌前538年には、バビロン市に捕囚として留め置かれていた諸民族を帰還させる事業を開始したとされる。しかし、前530年にキュロス王が崩御し後継カンビュセス王(在位=前530~522年頃)が即位すると、さまざまな混乱が生じた。これを収め、ペルシア帝国の基礎となる統治制度を築いたのが、ダレイオス王(I世。在位=前522~486年頃)である。

・「エズラ記」は、ダレイオス王(I世)の時代に「預言者」として活動した「ハガイとイドの子ゼカリヤ」の活動を描いた上で、続くアルタクセルクセス王(在位=前

465~424年頃)の時代に王の書記官として仕えていたエズラが再建事業の滞っていたエルサレムに派遣され、「律法」の再授与者としてユダの民を指導し、「エルサレム神殿」と「律法」を基礎とした「ユダヤ共同体」を確立した経緯を物語っている。なお、正典「エズラ記」は、ペルシアの歴代王を年代順に扱っていない。・預言者ハガイは、ユダの総督および大祭司に仕える人物であり、事実上「宮廷預言者」と同じ役割(王=支配者への助言)を担っていたと考えられる。ただし、当時のユダの総督および大祭司は、ペルシア王によって任命された役人の立場であり、おそらくハガイのような「預言者」も、書記官エズラの場合と同じように、バビロンの祭司団に属する者たちの中からペルシア王の許可を得て派遣されたのだろう。

・「エズラ記」が伝えるように、バビロンからの帰還およびエルサレム再建の事業は、周辺地域の権力者の利害争いに巻き込まれて遅々として進んでいなかった。ダレイオス王(I世)の時代、またアルタクセルクセス王の時代に、預言者ハガイおよびゼカリヤや書記官エズラが派遣されて事業のテコ入れがされたのは、この地域の統治に対するペルシア王の思惑があつてのことだろう。つまり、この地域の安定統治を推し進めるために、諸民族の中でもバビロニア支配時代以来、支配者王権に比較的従順であつた「ユダの民」が、一定の勢力を確保・維持することを得策としたのである。そのために、この地域に統制可能な社会集団が組織されることを後押ししたということは、十分に考えられる。このような世界状況の中で実現した「エルサレム神殿」および「ユダヤ共同体」の再建事業であっても、それを神の計画の中に位置づけることを企図した者たちの「信仰告白」が、「預言書」をはじめとする正典聖書の編纂へと実を結んだのであろう。

**使徒書日課(IIコリント6章より)**

・「コリントの信徒への手紙二」は、「使徒パウロの書簡集」に含まれる一書で、パウロがコリントの教会に宛てた一連の書簡の中のの一つ。「手紙二」は複数の書簡をまとめたものである、と考える学者もいる。

・コリントの教会は、パウロだけではなく、ローマの教会共同体出身のユダヤ人夫妻アキラとプリスキラや、エジプト・アレクサンドリアの教会共同体出身のアポロなど、さまざまな異なる伝統の中で育まれてきた信仰者の寄せ集めのような共同体であつた。ここでパウロは、自身の福音理解を押し通す仕方ではなく、さまざまな異なるものを受け継いだ信仰者の集団が「一つの共同体」として形成されるために何が必要かを問い、一連の書簡を書き送ったと考えられる。彼がたどりついた「一つの共同体」としての教会の姿は、「洗礼によって授けられた一つの聖霊によって、それぞれに異なる賜物を与えられた者たちの、《キリストの体》としての教会」(Iコリ12章)というものであつた。そして、このような教会観を明確にするもう一つのイメージとして「《神の霊の宿る神殿》としてのキリスト者」像を打ち出

している(Ⅰコリ 6 章)。日課箇所は、その「《神の靈の宿る神殿》としてのキリスト者」という考え方に基づいて、信仰者の各自がどのような姿勢で自分の生き方を律するべきかを説いている。

・パウロがコリントの教会の信者に対して抱いていた懸念には、さまざまな倫理的問題(異性問題や民事的係争問題など。Ⅰコリ 5~7 章など)と宗教的問題(偶像へ献げられた肉の扱い。Ⅰコリ 8~10 章)があった。厳格なユダヤ人としての倫理観・宗教観を土台に持つパウロから見て、コリントの人々の行動や発想は目に余るものがあったのだろう。とは言え、それらに対する警告は、必ずしも相手に受け入れられなかったと思われる。日課箇所は、そのような経緯を踏まえて、パウロがあまり具体的な事柄に踏み込まずに、共通の土台となる倫理観・宗教観を示そうとして記していると考えることができよう。

・16~18 節の引用は以下。レビ 26:12、エゼ 37:27、イザ 52:11、エゼ 20:34、サム下 7:8,14)

### 福音書日課(ルカ 21 章より)

・日課箇所は、「やもめの献金」の逸話と、続く「神殿を巡る対話から始まる終末に関する教え」の箇所の冒頭部分。「やもめの献金」の逸話は「マルコ」と「ルカ」だけが伝えている伝承であるが、「神殿を巡る対話から始まる終末に関する教え」は「共観福音書」が共通して伝えている。

・「やもめの献金」を、「ルカ」は「マルコ」よりも簡潔に描いている。しかし、主イエスの言葉の中で、「マルコ」が「貧しいやもめ」を「皆」と対比して語られたとして伝えているのに対して、「ルカ」は、「貧しいやもめ」を「あの金持ちたちは皆」と対比して語られたように伝えている。「貧しい者」と「金持ち」の対比は、「ルカ」の伝える主イエスの教えの中でも重要な課題として理解されており、ここにもその考えが反映されている。ただし、「ルカ」は、「金持ち」を批判することよりも、彼らが「貧しい者」に関心を持ち、関わり、「分かち合う」ようになることを、主イエスの教えの焦点として据えている。

・「神殿」は、「ルカ文書」においては、なお重要な宗教的営みの場として位置づけられている。しかし、「ルカ文書」が記された時代には、すでに「エルサレム神殿」はユダヤ戦争の帰結として破壊され、機能を失っていた。「ルカ文書」下巻の「使徒言行録」は、「エルサレム神殿」に代わる「神殿」として、「聖霊の降臨する教会共同体」を位置づけようとしている。

### 来週の誕生日 (1月29日~2月4日)

### 主日礼拝の讃美歌から

・21-360 番「人の目には」は、19 世紀スコットランドの自由教会(非国教会)牧師 W.C.スミスが作詞した原歌詞が改変されながら讃美歌集に採用されてきたもの。曲は、ウェールズ民謡とされるが、詳細は不明。

・21-509 番「光の子になるため」は、米国聖公会信徒の女性教会音楽家トマーソンの作詞作曲。1966 年夏の異常な猛暑の中で着想された。

・21-476 番「あめなるよろこび」(=Ⅱ150 番)は C.ウェスレーの代表的な讃美歌の一つ。『讃美歌 21』で改訳されている。曲は、ドイツ生まれでアメリカで活躍した音楽家ザンデルの作。日本では別の曲(475 番=Ⅰ352 番)との組み合わせで歌われてきたが、476 番の曲や別の曲が近年は標準になっている。

### 21-360「人の目には」

#### *Immortal, invisible*

1. Immortal, invisible, God only wise, / in light inaccessible hid from our eyes, / most blessed, most glorious, the Ancient of Days, / almighty, victorious, thy great name we praise.
2. Unresting, unhasting, and silent as light, / nor wanting, nor wasting, thou rulest in might; / thy justice like mountains high soaring above / thy clouds, which are fountains of goodness and love.
3. To all life thou givest, to both great and small; / in all life thou livest, the true life of all; / we blossom and flourish as leaves on the tree, / and wither and perish but naught changeth thee.
4. Great Father of glory, pure Father of light, / thine angels adore thee, all veiling their sight; / all praise we would render, O help us to see / 'tis only the splendor of light hideth thee.

### 21-509「光の子になるため」

#### *I want to walk as a child of the light*

1. I want to walk as a child of the light; / I want to follow Jesus. / God set the stars to give light to the world; / The star of my life is Jesus.
- [Refrain] *In him there is no darkness at all; / The night and the day are both alike. / The Lamb is the light of the city of God; / Shine in my heart, Lord Jesus.*
2. I want to see the brightness of God; / I want to look at Jesus. / Clear Sun of righteousness, shine on my path, / And show me the way to the Father.
3. I'm looking for the coming of Christ; / I want to be with Jesus. / When we have run with patience the race, / We shall know the joy of Jesus.

### 21-476「あめなるよろこび」

#### *Love Divine, All Loves Excelling*

1. Love divine, all loves excelling, / Joy of heaven to earth come down; / Fix in us thy humble dwelling; / All thy faithful mercies crown! / Jesus, Thou art all compassion, / Pure unbounded love Thou art; / Visit us with Thy salvation; / Enter every trembling heart.
2. Breathe, O breathe Thy loving Spirit, / Into every troubled breast! / Let us all in Thee inherit; / Let us find that second rest. / Take away our bent to sinning; / Alpha and Omega be; / End of faith, as its Beginning, / Set our hearts at liberty.
3. Come, Almighty to deliver, / Let us all Thy life receive; / Suddenly return and never, / Never more Thy temples leave. / Thee we would be always blessing, / Serve Thee as Thy hosts above, / Pray and praise Thee without ceasing, / Glory in Thy perfect love.
4. Finish, then, Thy new creation; / Pure and spotless let us be. / Let us see Thy great salvation / Perfectly restored in Thee; / Changed from glory into glory, / Till in heaven we take our place, / Till we cast our crowns before Thee, / Lost in wonder, love, and praise.